花火の翌朝

周辺地域の方や婦人会ほか多くのボランティア約百六十人で周辺のゴミ拾いが行われました。今年も大人に混じって子どもたちが参加している姿が見うけられました。

昨年よりも減ったとはいえ、収集車三台分のゴミが集められました。大会実行委員会でも「エコで行こう」とゴミ持ち帰り運動を行いましたが、周知徹底は難しかったようです。暗闇も作用してか、土手には列を成してビニール袋に詰まったゴミが捨てられていました。

「ついつい」という気持ちはゴミと一緒に袋に詰め、各家庭まで持ち帰ってこそ素晴らしい大会となります。

大会に際し矢板・那須線と会場周辺の道路で交通規制が行われました。昨年以上の人出を見込んで安全の確保を目的に規制されました。交通閉鎖された道路には家族連れが会場までの道のりを歩いていく姿でいっぱいになっていました。

交通規制の範囲に位置する商店や住民へは、実行委員会のメンバーが事前に了承を得るために一軒ごとに訪問しました。不便が生じ得ない状況でありましたが、多くの住民の理解と協力があって、市民が安心して会場へ集うことができたといえるでしょう。このような協力も大きな力となって花火大会の成功につながったのではないでしょうか。

しかし、車に関しては別の問題が発生しました。「路上駐車」です。指定の駐車場には市役所の職員をはじめとするボランティアスタッフが配備されていましたが、会場までの距離に問題があったのでしょうか。会場周辺の規制の掛からなかった路地で違法な路上駐車が多発し、帰りの時間には、歩行者と車との危険な状態が発生していました。交通規制に協力した周辺の商店や住民はかなり迷惑をこうむったであろう。

昨年以上の人出で会場周辺の駐車場はたいへん混雑していましたが、矢板南産業団地や矢板中学校にも駐車場は設けられたにもかかわらず、周知不足からか送迎に用意されたバスやタクシーはうまく機能していませんでした。車の問題は大きなイベントにおいて重要な課題となりそうです。

ゴミの持ち帰り、車の違法駐車に関してはさらなるマナー向上が求められそうです。

しかし、一つ一つを個人が実行していけば可能な事です。これは小さな市民力となるでしょう。個人ができることを積み重ねて「ゴミ無し」運動も実現できそうです。

矢板の名産紹介

「よそに行く時、何をお土産にするか困ってしまう！」そんな方も多いのでは？今号も、伝統を守りながら地域に根ざしている和菓子店をご紹介いたします。ぜひ一度ご賞味あれ！！

菓匠 はりまや（扇町）

明治十八年、歌舞伎役者のかたわら、黒糖饅頭の製造・販売を始めたのが初代で、店の名前も歌舞伎小屋「はりまや」に由来するとのこと。今、売れ行きトップのアップルクーヘンは、四代目が発案。二十年ほど前から店頭で販売はしていましたが、さほどの売れ行きではなかったとか。しかし、矢板のりんごが少しずつ有名になるにつれ、矢板のイメージのお菓子として好評を得るようになり、ここ七、八年ほど前からは、県外からも注文がくるほどに。

お勧め品として、はりまや限定のどら焼き（あん、バター入り、栗入り、生クリーム入り）。特に生クリームとあずきは相性が良く、大変好評とのこと。

また、実りの秋には、サツマイモを使った「高原ポテト」や、家族で食べていただけるようにと、栗入り焼き菓子を「親子栗」と名付けて販売。

やはり菓子作りは「あずき」であると北海道の十勝小豆を使用し意欲を燃やす五代目の当主である。ベイシア、ヨークベニマルなどの店舗でも買い求められる。

代表菓子
はりまやの**どら焼き**

木村や（片岡）

初代は氏家のきむらやで修行後、昭和三年、現在の片岡駅より南に二百㍍先の場所で創業。代表菓子となる八方の月は創業四十一年目に二代目が考案。白あんにコーヒーを混ぜたあんが特徴で、金色のカップを使用し、八方ケ原を照らす月をイメージしている。ほかには、丸ごと梅が入っている梅の初花、焼き菓子の桃山などが売れ筋とのこと。

夏場はアイスどら焼きも人気があり、バニラ、抹茶、ストロベリー、あずきなどの種類がある。

和菓子と洋菓子の融合をテーマに常に新しい素材を研究している三代目当主の力作は下野の城。旅行先でみた城の石垣をヒントに生まれたもの。和三盆のロどけとミルクの香ばしさが広がる焼き菓子。「ぜひ、ご賞味ください」と力がはいる。

小麦を国内産に切り替えたり、小豆も北海道産とこだわりを持ちながら、常にお客さまに喜んでいただけるものを提供していきたいとのことです。

代表菓子　**八方の月**